

東海道五十三次 てくてく歩く日帰り一人旅 太田康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その①

3年ほど前、『ひたすら歩いて東海道日帰り一人旅 by 青春 18 切符—俳句付き紀行エッセイ—』という酔狂な旅をして全行程を踏破した。題名にあるごとく宿泊施設を一度も利用せず、前回の続きから歩き始めて繋いで行くという、青春 18 切符を最大限有効利用した徒歩の旅であった。旧道は探しにくく、道に迷いながらも誰にも迷惑をかけずに 2 年がかりで成し遂げた一人旅であった（平成 17・9・9～19・9・8）。東海道に残る地味な遺跡だけは見逃すまいと目を皿にして、ひたすら歩いた。ということで、道中で発見したものはいまだに観光名所になっていない、したがって顧みられることのないスポットばかりである。題名に「知られざる穴場」と入れた所以である。

手始めに今回は日本橋界隈から筆を起こしてゆこう。申し遅れたが、江戸に近い数宿だけは、今は列車のダイヤから消えた鈍行の「ムーンライトながら」を利用しているので尾張一宮駅からだと 30 分ぐらいは前日にかかっている、厳密に言え

ば「日帰り」に当たらないことを付言しておく。



（歌川広重 日本橋）

東海道五十三次の起点に当たる大切な日本橋であるが、今は無残な環境の中に残骸のごとく横たわっている。それを知るのも一興かもしれないが、何しろ無粋な首都高速が上に覆いかぶさり何の変哲もない橋に成り下がっているのである。とはいっても、掘り出し物を幾つか見つけることが出来るスポットではある。橋のたもとは「国指定重要文化財」、「日本橋魚河岸跡」等の説明板、さらには「日本国道路元標（複製）」のものものしい碑がある。複製とあるので本物は何処にあるのかと橋のたもとの交番で聞いてみると、橋

の中央部の車道のセンターラインの下に埋めてある由。今でもここが日本の道路網のスタートラインであることが分かった。さらに日本の主要な都市への里程標も建っており、里程標と銘打ちながら何故かキロで示されていた。名古屋までは370キロ。

日本橋に別れを告げて1番目の宿場の品川に向かって歩いて行くと、京橋に「京橋の大根河岸—八百八町の食を支えた青物市場—」跡の説明板、もう少し先に「史蹟江戸歌舞伎発祥之地」碑があった。さらに歩き進んで銀座に入ると、右から始まる横書きが懐かしい、「銀座発祥の地—銀座役所跡—」碑があった。「銀座の鑄造所“銀座”」、「桜田門外の変」、「江戸の運河・三十間掘」の説明板が続く。新橋付近は工事中で大きく回り道をしなければならず、街もごたごたした感じで見るとべき史跡はなかった。

JR 田町駅の少し手前で、「江戸開城 西郷南州・勝海舟会見之地」の歴史的な碑に出くわした。少し先に「田町薩摩邸（勝・西郷の会見地）附近沿革案内」もあって、勝海舟が礼を尽くして薩摩邸へ出向いて会見が行われたことが分かった。その少し先に高輪の大木戸跡の石垣が歩道を塞ぐ形で残っていた。だからここだけ歩道はカタカナのコの字の逆の形に凹んでいた。日本橋を出発してからここまで、たまたま左側の歩道を歩いて来たのが、大正解であった。片側2～3車線を挟んで反対側を歩いていたら、西郷・勝会見之地碑も高輪の大木戸跡の石垣も絶対見つけることが出来なかったであろう。

「お江戸日本橋七つ立ち 初のぼり 行列そろえてアレワイサノサ コチャ高輪 夜明けて提灯消す」というよく知られている唄に出てくる大木戸で、日本橋を七つ（午前4時頃）に立つと提灯

を消して開門の日の出の頃、ここを通り抜けられるというのである（江戸時代の不定時法の解説はカット）。それにしても昔の大名行列は帰国出来る喜びで、随分早立ちをしたものである。この先の高輪の泉岳寺は殆ど寄り道にならないほどの近さだったので訪れたが、観光スポットは拙文のサブタイトルに反するので、何も触れないでおく。

いや愛知県民としてはテロリスト集団を美化して伝える『仮名手本忠臣蔵』がどうにも我慢ならず、立川談志の言葉だけは紹介しておこう。「赤穂浪士300人のうち47人以外は逃げちゃった。逃げちゃった奴らはどんなに悪く言われたか。落語はね、この逃げちゃった奴らが主人公なんだ」（「中日春秋」21・1・16）。道草ついでにここで詠んだ拙句を紹介しよう。いややっぱり止す。道草の屋上屋を架すことになるから。呵々。

この先 京急線北品川駅付近で広い国道15号（第一京浜国道）と別れて左折、踏み切りを渡るとその道が旧東海道。面影を残す道だが遺跡は少ない。まず「歩行新宿土蔵相模」の説明版なしの碑。帰宅して調べてみると、「土蔵相模」は旅籠の名で、幕末、御殿山にイギリス公使館が建設されると、長州藩の高杉晋作や久坂玄瑞らがこの土蔵相模で密議して焼き討ちをかけた由。その御殿山下に設けられた台場へ下って行く「台場横町」の説明板もあった。それによると、嘉永6年（1853）ペリー率いる4隻のアメリカ艦隊が浦賀に来航した後、幕府は江戸防衛のため、品川沖に品川台場の築造に着手。他に陸続きの御殿山下台場を完成させたとのこと。そこへ下って行く横町がこの「台場横町」で、うんと近くまで海であったことをうかがわせる。

さらに進むと品海公園があり、園内に「品川宿の松」の説明版と「日本橋より二里」の道標（品川一里塚）があった。その後「品川宿本陣跡」地があり、「東海道品川宿是より南品川宿」へと続く。これでやっと江戸



（歌川広重 品川宿）

から1番目の宿に辿り着い

たわけである。言うまでもないことだが江戸日本橋と京都三条大橋は五十三次に入っていない。広重の「東海道五十三次」も両橋を入れて55枚ある所以である。1番目の宿場まででこんなにか

かっているのはいつ終るやら、はなはだところもとない次第。先を急ごう。

もう少し先の「幕府御用宿釜屋跡」の説明版には新撰組副長土方歳三も他の隊士たちと逗留していた旨の記述があった。さもありなん。

この後、先に別れた国道15号線と再び合流する手前の所に、「都旧跡 鈴ヶ森刑場跡」が保存されていた。敷地内の圧巻は、「火灸台」と「磔台」であろう。「火灸台」の説明では、「八百屋お七をはじめ、火灸りの処刑者はこの石の上で生きたまま焼き殺された」とはあまりにも生々しい。「磔台」の説明板の下の石は真ん中に穴が空いていて、「丸橋忠弥をはじめ、この穴の上に丈余の角柱を立ててその上部に縛りつけて刺殺」とあった。

この後、「梅屋敷と和中断売薬所跡」と記された梅屋敷公園があり、亀戸の梅林と並んで蒲田の梅屋敷として広重の浮世絵にも描かれた名所であったとの説明板があった。